

エレクトロニクスで社会に貢献する



12 マルーシカと12の月 (スロバキアの民話)

心やさしいマルーシカと、わがままなホレーナの姉妹。

母親は本当の子ではないマルーシカを追い出すため、真冬にスミレの花をつみに行かせました。あるはずのないスミレをさがして森の中をさまようマルーシカ。たき火を見つけて近寄ってみると、そのまわりに12人の男がいました。それは、1月から12月までの「月」でした。マルーシカの話を聞き、3月がつみをふると、大地が春の緑におおわれました。マルーシカは大よろこびでスミレをつんで家に帰りましたが、次はイチゴ、その次はリンゴを取りに行かれました。そのたびに、6月と9月がそれぞれ助けてくれました。リンゴが2つしかなかったので、ホレーナはよくばって自分で探しに行きました。ところが、わがままなホレーナは12月を怒らせて、雪に埋もれてしまい、後を追った母親も帰ってくることはありませんでした。マルーシカは3月のように美しい若者と結婚し、いつまでも幸せにくらしました。

少女のやさしさが、時の奇跡を呼びました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●どうして「カレンダー」?

暦をもとにした昔ばなしは大変めずらしいですが、「マルーシカと12の月」は、これが原案となった「森は生きている」というお芝居で有名かもしれませんね。人間はなぜ暦を作ったのでしょうか。それは、春の雪どけ水による大洪水や日照りによる干ばつを予測したり、穀物の種まきの時期を正確に見定めることが農耕民族にとって重要なからです。エジプトには古くからかなり正しい太陽暦があったそうですが、形に目立った変化が現れない太陽より、周期的に満ち欠けをくり返す月のほうが古代人共通の時めやすでした。「月が出たぞお!」当時の祭司は三日月の出現を皆にラッパで知らせたそうです。ラテン語に *calo* (呼び集める)という言葉があります。ローマで 1 日を *calendae* といったのは「月を呼んだ日」という意味があったとか。これが「カレンダー」の語源となったとは興味深いことですね。

●1週間はどうして7日?

古代バビロニア人は夜空の星ぼしが規則正しく隊列を変えずに東から西へ移動することを発見しました。さらにその中にまったく不規則に動く5つの星、惑う星、すなわち惑星の存在に気付いたのです。この5つの星とは水、金、火、木、土星のことです。彼らはそれぞれの星に神が宿ると信じ、太陽神・月神を加えて《7》という聖なる数字を導き出しました。いっぽう、夜空の月は約29.5日でその形を変えます。目に見えない

新月から右半分の月をへて満月へ、さらに左半分の月へと約7日ごとにその形が分かれます。このように、聖なる神の星の数と日常生活のめやすとなる月の動きがほぼ一致していたため、1週間7日という時間の句切りが確立されたそうです。

●どうして1年は冬の1月から?

日本では、明治33年に政府が採用したグレゴリオ暦(1582年・ローマ教皇が制定)が使われています。この暦の源流は紀元前8世紀にローマ帝国建国の祖、ロムルスが作ったとされる暦で、春分近くの新月の日(現在の3月頃)から1年が始まる自然科学的な暦でした。しかしこの暦、冬の約2ヶ月間は日付がない不便な暦だったので、次の皇帝ヌマがそこにヤヌアリウスとフェブルアリウスという2ヶ月を加えました(ヌマ暦)。ところが後の皇帝が、「ヤヌアリウス月の語源となった神ヤヌスは行動の始めをつかさどる神であるからこの月が年初にふさわしい」と年初を変えてしまったらしいのです(紀元前153年)。そして、有名なユリウス・カエサル帝がこの月を正式な年初の月と制定しました(ユリウス暦・紀元前46年)。ローマ皇帝の決定した第1月が、現在私たちが使っている暦にまで引き継がれているとは驚きです。でも、どんな皇帝の権力も、マルーシカの素直なやさしさが起こした奇跡には、かないませんね。

昔ばなし監修／白百合女子大学教授 小澤俊夫
取材協力／横浜こども科学館天文係 出雲晶子